

第5章 総括

今回の調査で得られた研究成果を5つの節にまとめた。その内容は以下のとおりである。

第1節 遺跡周辺の土地開発

第2節 弥生時代の集落動向

第3節 弥生時代の鉄器加工

第4節 出土遺物から見る遺跡の様相

第5節 古墳時代の周溝墓

なお、4次報告書の総括では、以下の5つの項目が今後の研究課題として取り上げられている。

課題①南大原遺跡の範囲

- ㄥ ②栗林式土器文化における土器棺墓の存否
- ㄥ ③打製石鏃等の小型剥片石器製作廃止の実態
- ㄥ ④植物の穂状花序（花穂）を原体とした施文実態の解明
- ㄥ ⑤千曲川水系における弥生時代中期後半～後期の鍛冶遺構の検証

以上の5点については、それぞれ各節で言及した。

- ①：遺跡及び周辺の地形形成史の観点で第1節、弥生時代の集落形成と展開という観点で第2節において遺跡範囲にかかる新たな知見を提示した。
- ②：本集落における墓域のあり方という観点で第2節において言及した。
- ③：本次調査における出土石器の様相から第4節において再考した。
- ④：本次調査で出土した穂状花序原体施文の事例を第4節で紹介した。
- ⑤：中期後半の集落内の事例としては、国内でも非常に速い段階の鉄器加工が行われた可能性が指摘されており（鶴田2016）、研究者の注目を集めている（杉山2019・村上2020）。ここでは第3節で鉄器加工等が行われた場としての考察、第4節で出土遺物が遺跡の様相とどのようにかかわるかを踏まえて、新たに分析した。

第1節 遺跡周辺の土地開発

第2章でも触れたとおり、千曲川は本遺跡の東側にあるが、これは1870～1872（明治3～5）年の瀬替え工事以後の状況であり、それ以前の千曲川は遺跡東側の高丘丘陵沿いを流下していた。字名に「古川」として残る旧河道は低地帯のまま残っているため、現在も地図や航空写真で明瞭に識別できる（第1図、巻頭写真4）。

瀬替え工事からおおよそ150年間に上今井橋の架橋や県道建設等といったインフラ整備と共に、土地利用も大きく変化しているため、現在の地形環境だけでは二千年前の弥生時代の環境を理解することは難しい。そこで、中野市や長野県立歴史館保管の幕末から明治初期の絵図や、国土地理院旧地形図を通して、遺跡周辺の土地開発の変遷を理解し、二千年前の古地形を考察する。

1 絵図等に見る遺跡周辺

(1) 上今井村耕地絵図

表書きに「上今井村耕地繪圖」とある、この絵図は「(仮称)山田家資料館」(中野市江部)¹保管の『東江部村山田庄左衛門家文書』を構成する1万余の資料群に含まれるものの一つである。2021年4月26日に実見・写真撮影を行った(第7図)。

図の大きさは横幅241cm、縦214cmで、糊でつなぎ合わせた和紙に墨書され彩色が施されている。年代は不詳であるが、1861年頃～1869年(文久年間から明治2年)までの間に作成されたと想定される²。千曲川が旧河道を流れ、瀬替え予定ルートが赤い点線で示されているため、瀬替え事業実施にあたって事前申請等の目的で作成された絵図と考えられている。明治時代以後の測量図程の精度はないが、東西南北の方向が示され、字界や字名が明確に表現されているばかりでなく、周囲の山々の形状や千曲川崖部の表現も細かく、現在の地図と十分照合可能である。また一筆ごとに土地利用別の色分けがされていることが大きな特徴で、これによって当時の地形環境もおよそ把握できる。色分けは図左上に凡例が示され、道が赤色、川は水色、山が緑色、田が黄色、畑が灰色である。

絵図をみていくと、千曲川は東西に描かれる山体の間を図の下(南)から上(北)に向かって流れる。図下から東に曲流して北側で丘陵部にぶつかって急峻な崖面を形成し、そこで西に大きく方向を変えて大俣村を取り囲むように北流する。千曲川西岸には流路に沿うように畑地がある。西側山体の麓には南北に通ずる道があって、その周囲に人家や寺社が集まって集落を形成している。千曲川沿いの畑地と西側山体及び集落との間には水田が広がる。

こうした状況を現在の地形や地図情報、地質環境等から考察すると、東側の山体が長丘丘陵、西側の山体が赤塩丘陵、千曲川の流れは旧河道部とそれぞれ合致する。畑地は千曲川の蛇行部西側に大きく発達した滑走斜面先端に形成された自然堤防と理解できる。また赤塩丘陵際を北上する道は長野市から飯山市に抜ける飯山道³であり、集落は当時の上今井村、つまり現中野市上今井地籍である。上今井村一帯は赤塩丘陵から流下する小河川によって小さな扇状地となって小高くなっている。この扇状地末端と千曲川沿いの自然堤防との間の低地部は赤塩丘陵から流れ出る水が集まる、いわゆる後背湿地で近世には水田に利用されていたことがわかる。旧千曲川沿いの自然堤防上は水はけがよい集落適地であって、千曲川や後背湿地等の水資源が豊富なことが、縄文時代から弥生時代、古墳時代まで集落が形成された南大原遺跡の立地環境に大きく影響していたのであろう⁴。

また水田部分の字名にある「逆川」や「サカサ川」は地形的に北側が高く南側が低いため、千曲川と逆方向に水が流れていたことから付けられたと考えられる。現在、上今井地区を流れる本沢川も同じように南流して現千曲川に合流していて、この一帯の地形環境の特徴ともいえる⁵。

(2) 令和元年東日本台風

この絵図から導き出した江戸時代までの地形環境を図らずも眼前にできたのは、調査中に洪水被害をも

1 江戸時代初期の来住と伝わる山田庄左衛門家の土蔵群・家屋敷・庭園と収蔵資料を公開している。江戸時代から昭和20年代の文書史料、書画・工芸品、生活・生産民具、書籍等、山田家歴代が集積した資料を目録化し、調査・研究に公開している。中野市教育委員会事務局が管理する。

2 (仮称)山田家資料館寺島正友氏のご教示による。これとは別の文久年代の絵図には瀬替え予定ラインが手書き修正されているが、本図ではその部分が予め書き込まれているため、文久以後の製作と考えられる。

3 大正時代の国道10号線(東京～高崎～秋田)、その後1973(昭和48)年に上今井バイパスが開通するまでの国道117号線と重なる。上今井区本沢川に架かる今井橋には銘板に「いまいはし 国道拾号線本澤川(大正拾四年八月竣工)」と刻まれた欄干が残る。

4 信州大学理学部教授保柳氏のご教示。

5 寺島氏のご教示による。

たらした、いわゆる令和元年東日本台風（台風19号）による千曲川の氾濫である。災害発生直後から国土地理院がインターネット上に公開した航空写真の1カットに絵図同様の旧地形が明瞭に映し出されている（第8図）⁶。撮影日時は2019年10月13日11時4分で、上流の中野市立ヶ花及び栗林地区で堤防越水が確認された同日3時25分⁷からおよそ8時間経過した時点の状況である。

写真は遺跡北東の長丘丘陵上空から南西方向に向かって撮影されていて、左下に志賀中野有料道路の料金所が見える。写真上の雲の切れ間にみえるのが上今井地区で、中央上を斜め横方向に走る道路が県道三水中野線である。そして、中央を弓なりに流れている茶色の川が現千曲川で、中央右の橋が上今井橋である。現千曲川の上流部（写真左）から分岐して下側に大きく蛇行するように別の流れをつくっている泥流範囲が絵図にある江戸時代までの旧河道に等しい。旧河道沿いで標高が高いため洪水被害から免れた緑地部が、現在果樹栽培が盛んな畑地で旧千曲川西岸に発達した自然堤防である。

調査区は上今井橋のたもとに位置し（赤丸箇所）、本来自然堤防上にあるが、改築工事で嵩上げされた三水中野線の高土手に一時的にせき止められて水位が上昇し、上今井橋下流から旧河道に向かって調査区内を勢いよく氾濫水が流れ、仮設建物等が流出する程の被害となった。

上今井橋下流では千曲川兩岸の水田や畑地にも大量の水が押し寄せている。この一帯は絵図の水田地帯で、地形的に低い後背湿地にあたる。南大原遺跡の包蔵地範囲は浸水を免れた自然堤防（緑地部）のうち、旧河道側の半分程の範囲を細長く括られているが、縄文時代から弥生時代の集落域や生活域を想定すると、遺跡範囲は自然堤防全体に及ぶ可能性もある。また自然堤防西側に広がる後背湿地には、弥生時代に遡る水田跡が残存することも、近隣の柳沢遺跡や川久保遺跡で当該期の水田跡が検出された調査成果から十分想定できよう（長野県埋文2012・2013）。

（3）明治初期の上今井村

瀬替え工事直後の状況は長野県立歴史館蔵の明治初期の絵図「上今井村絵図」に詳しい（第9図）。絵図は縦81cm、横102cmの和紙製で道路、河川、郡界、村界、字境が色分けや線種分けによって表現され、寺社古跡等名称が記されている。また図中央にある北城山山頂から高社山や飯綱山等の遠方の山々を見通す方位線が多数見られることが特徴的な図である（長野県絵図・地図共同研究事業実行委2017）。

図のほぼ中央には南北に走る飯山道があり、道沿いに西迎寺や普賢寺、諏方社（現上今井諏訪社）等の現存する寺社が見え、県史跡内堀館跡は内堀古宅としてコの字状に堀跡が描かれている。千曲川は瀬替えによって河道部は南北方向に直線的な流路となり、旧河道部は東縁を栗林村と大俣村との村界として、西縁を字境の線で表現されている。この流路は前述の上今井村耕地絵図にある予定ルートとほぼ合致し、多くの田畑が瀬替え工事によって失われたことがわかる。また現在の上今井橋付近には舟橋が描かれているが、上今井の渡しは瀬替え後の1872（明治5）年に役目を終え舟橋となったという記録がある（中野市1981b）。

2 地形図にみる遺跡周辺

前述の上今井村絵図は測量精度が高く、千曲川の形状や村界や字界は正確に捉えられるが、農地等の色分けがなく、土地の利用状況を理解するには山田家文書の絵図に比べて情報がやや乏しい。今回の調査範囲には旧千曲川河道部（調査A区）も含まれていることから、瀬替え後の土地利用状況を把握するため、

6 国土地理院ホームページ「令和元年東日本台風に関する情報」に空中写真や動画、浸水推定段彩図（速報）等のデジタル情報が随時公開された。

7 国土交通省千曲川河川事務所記者発表資料「令和元年10月12日洪水（台風19号）に関する千曲川河川事務所の対応について」〔第7報〕（2019年10月13日03時45分）を参照。

国土地理院発行の1／5万図歴地形図で変遷を追った（国土地理院1988）。

図歴地形図には1914（大正3）年～1988（昭和63）年までに発行された13枚の地形図（写し）が綴られている。ここでは代表的な旧地形図を掲載し（第113図）、旧千曲川河道部、自然堤防（遺跡付近、遺跡北方）、後背湿地（現千曲川左岸）、栗林遺跡付近の土地利用の変遷を整理する（第18表）。

それによると1914（大正3）年頃は旧河道部や遺跡周辺、栗林遺跡一帯も全面桑畑で、後背湿地のみ水田となっている（第113図A）。大きな土地改変がなく、旧河道部西岸に沿って自然堤防が長楕円形状に高まりとして図示されている。1934（昭和9）年には旧河道部に水田と乾田の表示があり、低地部を稲作耕地へ移行する兆しがみられる。水田表示のある旧河道下流部（大俣村側）は、現在でも湿地帯となっていて、現千曲川との合流部等から水を引きやすい地形といえる。また1923（大正12）年には瀬替え以後、舟橋だった上今井橋に木橋が架設され、周辺道路の整備が進んでいる。この他に飯山鉄道（現JR飯山線）の豊野―飯山間が1921（大正10）年に開通し、その路線と上今井駅が表示されている（同図B）。

1946（昭和21）年頃になると遺跡周辺でごく一部ながら果樹園栽培が始まり（同図C）、機械化と水田の乾田化事業が推進されていく。1964（昭和39）年頃には果樹園が急激に広がり、その範囲はそれまで空白地であった遺跡北方部や栗林遺跡周辺、後背湿地部にまで及んでいる（同図D）。1977（昭和52）年頃には県道三水中野線以南の現旧千曲川が分離した一帯（氾濫原）も水田が果樹園に変わっている（同図E）。

上今井橋の木橋は度々洪水に見舞われ、特に1945（昭和20）年の台風による大洪水では橋脚まで流出する被害に遭い、それを契機に1952（昭和27）年鉄製吊り橋に付け替えられた。その後、交通状況の変化に対応するため、1985（昭和60）年にやや上流側に現在の鉄橋が架橋されている（同図F）。その工事に伴い南大原遺跡では付け替え道路部分の発掘調査が実施され、弥生時代中期及び後期の集落跡が初めて確認されている（豊田村教委1980）⁸。

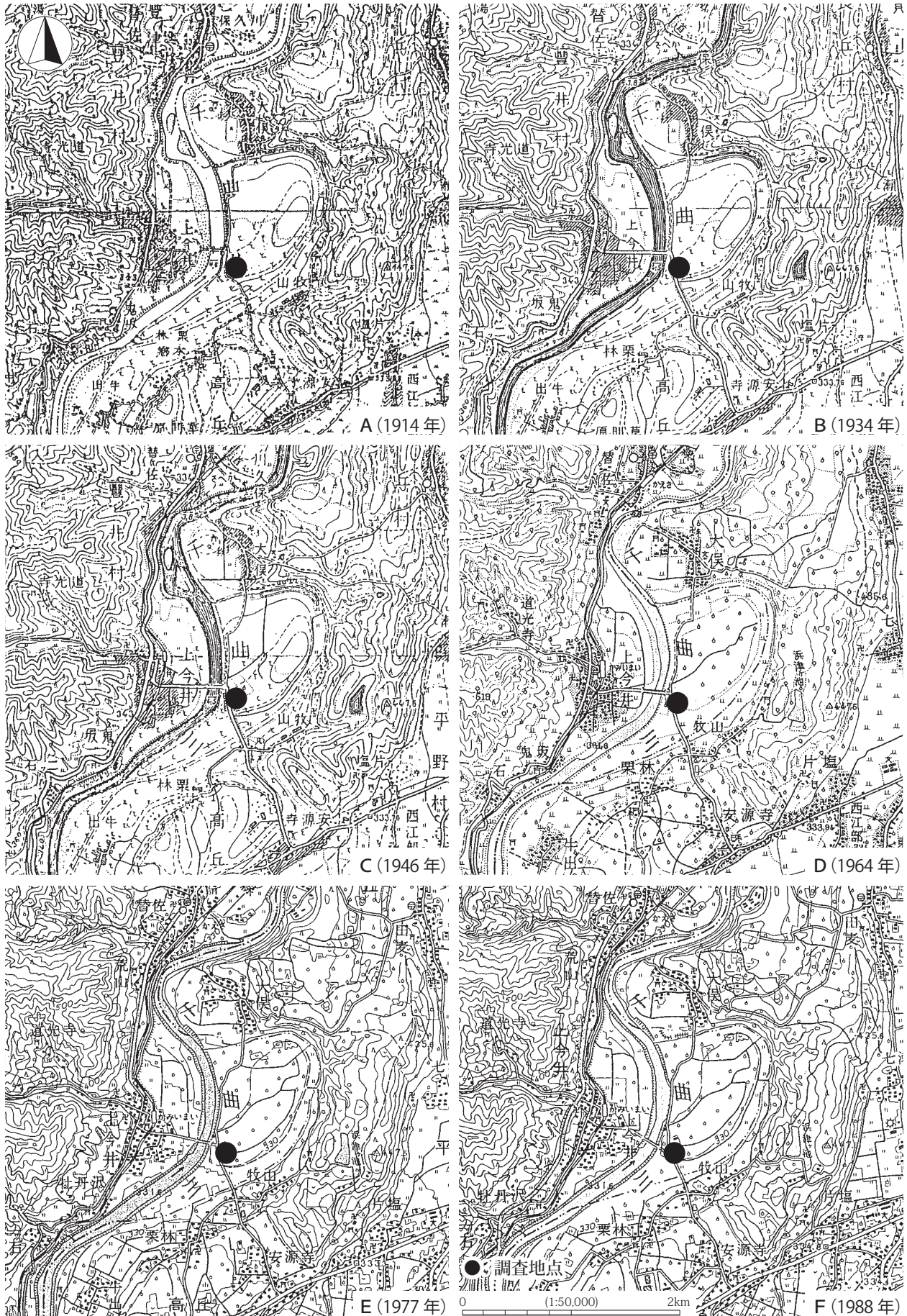
1988（昭和63）年頃には現千曲川西岸の低地部が荒地化する。また旧河道部も現在は水田がすべて畑地に変換された（同図F・第1図）。このことは現旧千曲川の低地部は洪水による耕土の流出や土石流の堆積等の被害が大きいことが影響しているのだろう。今回の発掘調査で、旧河道部を現地表下3mまで掘り下げてもビニール等を含んだ人工的な土砂が厚く堆積していて、洪水後の土砂処理等といった災害復旧が繰り返し行われていたことが分かる（第3章第2節参照）。そのうち現在の表層から50cmに検出された洪水砂は信州大学理学部保柳康一研究室の土壌分析によれば、1983（昭和58）年9月、立ヶ花水位観測所で、歴代最大水位11.13mを観測した台風による洪水堆積物の可能性がある（第4章第2節参照）。

3 現在の遺跡周辺

自然堤防上には1988（昭和62）年に工場が建ち、1992（平成4）年に竣工した県営一般農道整備事業によって、農園には舗装された農道が新たに整備され、畑地灌漑施設も行き届き、リンゴをはじめとする果樹栽培の一大生産地となっている。

現千曲川の河道は徐々に東岸を侵食して東方に移動しつつあり、瀬替え当時の直線的な形状から湾曲している。旧地形図ではそうした形状変化が1960年代以降に顕著となる（同図D～F）。このことは人工的に開削された流路が、瀬替え工事からおよそ150年を経て、幾度となく繰り返される洪水によって次第に本来の自然地形に沿った旧河道に近づこうする傾向があるといえよう。

8 この調査が南大原遺跡における第3次調査に位置付けられる。堅穴建物跡は弥生時代中期後半2軒、後期前半1軒が調査されている。今回及び第4次調査と同じ集落範囲の調査である。



第113図 遺跡周辺の1／5万旧地形図（国土地理院、加筆編集）

第18表 図歴地形図等にみる遺跡周辺の土地利用変遷（1914～2020年）

地図 No	掲載 No	発行年	測量年	著作権所有 印刷兼発行者	旧千曲川河道部	自然堤防上		後背湿地	栗林遺跡	備 考
		(和暦)	(和暦)			遺跡付近	遺跡北方	現千曲川左岸		
1	A	1914(大3)	1912(明45)	大日本帝國陸地測量部	桑畑	桑畑	空白	田	桑畑	
2		1915(大4)	1912(明45)	〃	桑畑	桑畑	空白	田	桑畑	
3		1927(昭2)	1925(大14)	〃	桑畑	桑畑	空白	田	桑畑	飯山鉄道開通(1921) 上今井橋木橋(1923)
4		1930(昭5)	1929(昭4)	〃	桑畑	桑畑	空白	田	桑畑	
5	B	1934(昭9)	1931(昭6)	〃	遺跡東：乾田 北東：水田	桑畑	空白	千曲川べり：桑畑、乾田	桑畑	
6	C	1946(昭21)	1937(昭12)	内務省地理調査所	遺跡東：乾田 北東一部：水田	桑畑、 一筆：果園	空白	千曲川べり：桑畑、乾田	桑畑	
7		1952(昭27)	1952(昭27)	地理調査所	遺跡東：乾田 北東：水田	桑畑、 一筆：果園	空白	千曲川べり：桑畑広、 乾田狭	桑畑	上今井橋吊橋(1952)
8		1957(昭32)	1952(昭27)	〃	遺跡東：乾田 北東：水田	桑畑、 一筆：果園	空白	千曲川べり：桑畑広、 乾田狭	桑畑	
9	D	1964(昭39)	1960(昭35)	国土地理院	全て水田	全て果樹園	全て果樹園	千曲川べり：桑畑無、 水田、果樹園	果樹園	
10		1967(昭42)	1966(昭41)	〃	全て水田	全て果樹園	全て果樹園	千曲川べり：桑畑無、 水田、果樹園	果樹園	
11	E	1977(昭52)	1974(昭49)	〃	主に水田 県道南：畑	全て果樹園	全て果樹園	千曲川べり：桑畑無、 水田、果樹園	果樹園	国道117号上今井バイ パス竣工(1972)
12B		1981(昭56)	1980(昭55)	〃	主に水田 県道南：畑	全て果樹園	全て果樹園	千曲川べり：果樹園、 畑、水田、果樹園	果樹園	
13B	F	1988(昭63)	1986(昭61)	〃	全て水田	全て果樹園	全て果樹園	千曲川べり：荒地、 畑、水田、果樹園	果樹園	現上今井橋架橋(1985)
第1図 (第1章)		2020(令2) ※更新年		〃	全て畑	果樹園、工場	全て果樹園	千曲川べり：荒地、 畑、水田、果樹園	果樹園、 宅地化	電子地形図25000

引用・参考文献

赤羽貞幸・加藤碩一・富樫茂子・金原啓司 1992『中野地域の地質 地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）』地質調査所

国土地理院 1988『1／5万 図歴地形図 中野』大阪人文社出版センター（長野市立図書館蔵）

杉山和徳 2019「中野市南大原遺跡にみる弥生時代の鉄器製作遺構」『信濃』第71巻第9号

鶴田典昭 2016「第7章総括 第2節弥生時代鍛冶遺構の可能性について」『南大原遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書111

長野県絵図・地図共同研究事業実行委員会 2017『長野県絵図・地図共同研究報告書 近代村絵図・地図の世界 明治の地図はどのようにつくられたか』（事務局：長野県立歴史館文献史料課）

長野県教育委員会 1982『歴史の道調査報告書 飯山道』歴史の道調査報告書X

長野県教育委員会 1991『歴史の道調査報告書 千曲川』歴史の道調査報告書XXXI

長野県埋蔵文化財センター 2012『中野市柳沢遺跡 千曲川替佐・柳沢築堤事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書 中野市内その3』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書100

長野県埋蔵文化財センター 2013『中野市川久保・宮沖遺跡 千曲川替佐・柳沢築堤事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書 中野市内その2』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書99

長野県埋蔵文化財センター 2016『南大原遺跡 一般県道三水中野線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書111

中野市 1981a「第2章村のしくみ 第4編近世の中野」『中野市誌歴史編（前編）』中野市誌編纂委員会

中野市 1981b「第3章交通通信の発達と商業 第1編明治時代の中野」『中野市誌歴史編（後編）』中野市誌編纂委員会

村上恭通 2020「基調講演 弥生時代鉄研究の現在」『令和2年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会』当日配布資料 全国埋蔵文化財法人連絡協議会・（公財）愛媛県埋蔵文化財センター

豊田村誌刊行会 1963『豊田村誌』

豊田村教育委員会 1980『南大原遺跡 上今井橋架け替え工事に伴う発掘調査報告書』

豊田村 2005『豊田村史現代編』